小移て慶安元年徳松君に附属せられ
侍抱守に役とし（御日記（今の西城切手御門番）松平加賀守乗雄の祖
か
ア

松平

兵庫頭源親良ハ甚二郎信乗の子なり
家譜 家傳 二河小せるを召し抱へ甚二郎と称す 家傳 實
ハ廣忠卿の御落胤なり祖父ハ親忠君の
六男なり刑部丞親光といふ福釜のうち
西端横芝赤松中和泉等の村を賜はり
そこに住せしかと西福釜の松平と稱し
家譜の按るに家傳に異説とあり親光安城と稱し或ハ
細川とも稱したりとあるにしたがふ既に寛永に改易せらるるに

慶安ゆめ〳〵之ゝ之ゝ寛永譜ゆゑ其系とのせ
さる人詳ならざる事多〳〵ゆゑて家譜によるべし　親光を

文亀二年九月今川氏親伊勢新九郎安氏
と志め〳〵金谷清城と攻る時安親君の
御とうけの城に後詰として働あり　大三川志

○按るに家傳永正二年の事
とあり今大三川志によりて改め〳〵る　如くて大永二年十
月十日小死す　大樹寺記○按るに家傳大享禄二年
宇利の城攻る親光深手を負遂に此年十
二月廿八日死せしと云ふ今大樹寺記によるに年たゝず思ふに
二月福釜の合戦の事親盛の事跡と混しるあやまりなるべし先
年も考るごとく寛永に改易ありて慶安より之をさしたる人
家傳と云ども取るに足らざるものあり大樹寺記ゆゑに

法名を光忠と云ふ　家傳大樹寺記　父信乗てしめ二郎
次郎と云ふ　家傳　享禄二年五月信康君三河
国吉田の牧野傳藏成命兄弟とうち合せ給ひ
て小坂井小戦ひ給ひしとき先陣乃松平
四郎信方敗走〳〵るをとゝも御旗本の備を
てうち破り〳〵せ給ひ〳〵ふ遂に成命兄弟うち
まけて戦死〳〵ぬ　家傳大三川志按るに家傳には此戦しを天文元年とし今大三川
志によりて享禄二年の事と定む　成命の弟傳次郎及び家人に

首とも多くとりて實檢ふいる　按ずるに家傳の文ならん傳次郎及び家人の首とも信秀ゟ討ごろしるやうにみゆ大三川志に大岡忠右衛門助勝傳次郎とゝりとゝ是ゟやいまゝ詳ゝ

同四年父ゟ遺跡をつく　家傳　天文九年六月織田信秀三河國安城の城をせむ城主松平安家人數少ゝして援兵をこゝふまに松平彦四郎利長松平甚太郎康忠等ゝ信秀加勢をゝて城外ゟ働きかゝる信秀敗走ゝて尾張國小俣ゟ歸陣ゝ　家傳大三川志　同十三年

信秀定まゝる妻ゟ廣忠卿懐妊の侍女を賜ひ出生の子男子ゝ也をよ汝ゟきゝて養ひ育ゝとのゝまゝしく関兼任ゝ雜刀を授ゝさせ賜ひゝ　家傳　此子則親貞ゝ

ゝ信秀永禄七年六月十二日ゟ死ゝ法名祝全忠ゝゝ　家譜○按ずるに家傳及永禄六年六月十六日死ゝ法名正山とあり　親貞ハ東照宮ゟめさゝ御側ちかく仕ゝまつりゝ

永禄六年一向宗ゝ徒蜂起ゝゝる時ゟゝひ

うき軍功あり元亀元年姉川の戦しるも
胄首二つとをとりたりる同じく天正二年二
方原に戦しかと法奉じ（家傳）天正三年長
篠の役に又胄首二級をとる同十二年長
久手役にも組討し高名と顯し首二級成
えたり又池田勝入に従士院桐供二番と鑓と
合せ（家譜家傳）遂に二つをとり討とりぬ同十四年
十月

東照宮中納言に進せ給ひしとき親良
を叙爵し玄庫改め紀伊国十八年国東に
移し給ひ時采地を賜はるべしと思ふ
し祈りているるみるそまつ増ありなる
幸田を膳正家に采地下總国葛西にいたり
て蟄居したり（幸田家譜家傳）翌年紀伊国名に河
内法藏寺を寫して一寺を建立し（家傳）元和二
年十二月紀伊に出国九年七月八日七十九歳

まして死し（家譜 家傳）按るに親良まてハ世系うせ
ひて事實紀ていさりの多くたてる寛永譜
に六親良信乗と兄弟とハ信乗ハ兄を庫入道親良としるるのと混して誤たるさ
ましく寛永のむかしてやく絶家とうしてハ事實に
うるもこてりうるたりく紀とかきく家譜と家傳のまし
と〜るに法名と善法といふ家譜 長子長二郎行隆（ゆきたか）二
河守る家傳 慶長五年
秀頼宮奥れ上杉景勝と結せ給ひんと下野
國小山まてく發向せさせ給ひしかとやうく
御馬と上方へひけさせ給ひ〜時行隆十一歳
ゆくゆ母とともうてまる下總國行德のしやうに
出ていく
秀頼宮ゆまみ元たてまつりしかはつ
うく腰物とて賜るる同十一年より四
小性とけとめ同十七年二河國碧海郡赤松
村うく采地と賜ふ家譜 家傳 二百七十石と知行
し秀武 實孫 同十九年大坂に役ゆ供奉〜元和
元年ゆも又從ひまいらせうる此役ゆ豆腐

御側を離れし附そしまゝせにけり
物の具せゝまゝのねせゝらに其勤勞類うき
と感ゝ思ゝめさまに佐枕鑓小卷俵をゝく
佐々佐ゝ賜りたり（家譜 家傳）五月七日佐方
崩せゝ時
東照宮に佐馬先二町ハゝ奈出ゝ欲の
やうと見定めゝく言上せゝらやうて茶磨
山まゝく出ゝてゝまゝて今日に午候ゝ

ひゝとめて給ひぬ（家傳）後
公德院殿より人御書院番とする寛永二
年法ゝ上ゝせ給ひゝ時扈從ゝ（東武實録）此年
より
大猷院殿に附さこせゝる（家傳）同九年二月
公德院殿に佐遺物として小判金五十兩と
賜てゝと（家傳 東武實録）此ゝ八月佐使番よりみ
十一月布衣と着たることゝゆるさる同十年

十二月采地として加賀れし二河國宮海郡ようく
千石と知行し同十一年二月松平勝五郎某
いとけなくして家と嗣ぎ知行使とし
て同幡國島取ようく國政と治め慶長
七月攝津國尼崎ようく城ととの事成
つと免同十三年二月法印付として松平伯
耆直ち配不豊後國萩原にいる記 御日 同十
四年冬肥前國嶋原し土民耶蘇の教ち傾

きく傾さに背き一揆を企りと聞えしか
こと鎮めがたんとて十二月九日板倉内膳正
重昌小石谷十藏貞清とそへてさしむける
又さしつく知隆とめさせ彼地ふいとう一揆
し形勢と見ていそき馳帰さと仰られ
ハ行隆やうくうち立ちく京をと形く道成
いそきに近江國水口驛ふく重昌ち遣
き是ようとそうち遣長月廿六日豊前

国小倉小倉きぬさるに道たてる人のいとと国八
嶋原の騒動かたうと形ゝ城ゝとこまとこ
めゝ落されいとゝ八土民ものそうゝ
さるてさ人も心とや合ぬらんかくていうれる
野心の者ゆうんもたうゝ城今や薩摩
の嶋津八此頃在国うまと八此ゝうの事も
心かてて嶋原ゆえあうゝ肥後国川
尻ふいうさまくに探りとめうまとうと

結ひいとけてさゝ八天草にうゝひうこ
角れ地八薩摩領ふちうれ故此あうふて
さうゝうやゝ窺ひとゝにて八嶋津の
家の子山下民部小輔と云るのまりと居
ゝうやゝ行隆うゝとにまいう嶋津の人八
者とと出ゝ内ゝうまとうゝ八ゝもかくもま
うゝ出れよゝ神ん出ゝよひまとうゝ
隆国ゝ其ゝの者ともはまう薩摩ゝ地ゝ

引とられよ事あらハたれう先んと言へ
しうハ民部少輔ハかゝこゝ所にて遅ぬかう
ゝ程に心ゝこゝる事れうハ廿九日まと
川尻より帰る牧野傳蔵成純林丹波勝正等
もこゝに来りしくともに細川うもとよりの城
幸ゐ再二南よりゝる川尻ゝまく聞つるハ大矢
野とゝる所ハ一揆ともゝ多く籠ふとゝひゝるう
たゝうくさゝうれ事見えさゝ是ハ行隆ハ細
川れ士大将有吉頼母とゝふ者にゝの見と
出ゝて見極めよとゝひゝるに一揆ともい
まハ此地と遅きこうとゝひいまとう行隆
ゝのゝゝみゝくさゝれハ一揆此邊に多くゝのう
と細川れ家老ともゝひつるふさる事れき
ハゝとゝふゝよれ者乃やさるふこゝとて
行隆ひゝう大矢野に行陸にのりうとてさ
ゝう見つまゝそのけゝきと見えさわ

りまこ以て此所ゟ立帰りぬ人々行隆ゟ形勢
と賞しけりとかくて十二月七日人々と
ともに大矢野ゟ押寄せ陽と探りも
とゝゝく明のさてる城と打ち十五日ゟ
一揆ども有馬原城ゟこもるとき牧野成
純林勝正等と船路と経て寄せれ勢に
なりて三ヶ月ゟ十五年正月元日ゟ諸方
に寄せ同時ゟ城と攻たりとゝゝゟ城おそも

力と書して防りまこ寄せ麻つこうとる
者多くして思ひ外ゟ敗走りり行隆
も甚攻口むりひとゝゝ佐方ひと崩した
崩ヶ月こ八これゟ八かりとうこく出た
ゟ乗いんと勇気と顯ハ進みゟ
堀際近くいるゟ須両のこゝをゟ川
矢玉ゟいとく膝とうこうまこれ八たりこと
えるゟ此節等ともに枝ら三ヶ地と過ル

なるかゝて二月廿七日城陥し時多くの寄
手由輪こに来りぬと聞えければ行隆
いまこ庶いえさうなるともかるたう陣屋
ふとゝんハむけまこちかゝ肩衷まのうて
屏れうちへうちこまれまくゝて討死せて
やゝ帝等ともふ枝ゝし遂に二の曲輪ふの
アとゝ入ゝふ榊原飛騨守職直出たう一番
ふ来りるう行隆と見くわまと一番来れ

高名せう後日證人とうまと又ゝうま子
たち使ふ働きともみゝまとゝひなま
行隆聞くきうゝ見ゝあうゝ比類うゝと
賞ゝたゝ此はいくに本九と来ゝんとて
五十ウ五行隆本九へさゝむうふ此事聞
つる人ゝ行隆う剛勇とたゝひうきうのおそ
賞ゝあひるかくてる成進みゝとゝに
一揆ゝも行隆う肩衷まのうたると見て討

とゝんと申すゝと行隆卿等ハ知らく
こゝと思せるゝ事ハ首ハまと討とりて
きゝらハさまと感ずるの首ハうち
捨るゝと聞つまこハそこて捨くる城攻入
とて幸九さてむゝひしたてハ山けくく
ゝて石垣高ゝまこハ要と捨くのゝとゝまと
下知ゝて家人等寺と馳ゝせるゝひるき戦
功と顯をゝたり（云行文丹貫書）事とて後江戸ハ
帰ゝときゝゝハ行隆ゝ卿ゝ卿ゝまこと
とのまゝ武勇とむもとゝてゝめうけ
つる仰ハ背きゝくゝまゝ居つるハ軍
令とそむゝとて七月其罪とたゝれ
ハのゝる方ゝ不幸と没収せゝまゝりゝご
まとも慶安元年六月其罪と免されし（家傳）
同二年十二月めゝ出さゝまゝく廩米千俵
と賜ふ（寛明日記○按ずるハ家傳ハ慶安元年たちハ高知と賜ふとゝ寛明日記ゝとゝてゝ）

同四年六月御先代の頃ふるう二百石と加へ
らるるく千二百石と知行し（御日記　家傳○子孫松平内膳）
親房寶暦二年遠流
ニて絶家絶ぬ

松平
加賀右衛門康次傳

訂誤　康次永禄元年十五歳にて
めし出され成瀬吉平久次ひ
く
東照宮に法傍近く侍りまつる云々
按ずるに成瀬吉平久次は参考に出るに久次は元和三年六十二
にて法名ふ三年に出家ふ三歳の若い動仕ふ之ニ理なり
ニて小久次ら名と挙
くい誤りなり